



綾部の地で70年。地域のみなさんのいのちを照らす。

ご自由にお持ちください

177
2026.1

地域で暮らし続けるための支援を、 病院から地域へつなぐ

Q1 地域包括ケア病棟の 特徴や役割について

須藤医師 当院の地域包括ケア病棟では、急性期治療を終えた患者さんだけでなく、当院外来で定期的に診ている方、ウォークインで来院された方、レスパイト利用、糖尿病の血糖コントロール、不調となった施設入所者の方など、多岐にわたる理由で入院を受け入れています。認知症疑いの精査や、退院後の生活を見据えたりハビリも積極的に実施しており、患者さんの状態や背景はさまざまです。

**Q2 患者さん・家族との関わりで
大切にしていること**
須藤医師 当院では、家族がいない、あるいは距離があるケースも多く、「家族」より「キーパーソン(以下KP)」という言葉の

対談 地域包括ケア病棟 担当医師(腎臓内科) 看護師長 須藤 佳樹 × 伊藤 可奈子

高齢化が進む地域において、急性期治療後の患者さんをどのように支え、再び自宅や地域での生活につなげていくのか——。その中心的役割を担っているのが、当院の地域包括ケア病棟です。医療と介護、そして地域の支援者が力を合わせ、患者さん一人ひとりの「これからの生活」を共に考え、形にしていく場所でもあります。今回は、同病棟を担当する医師と看護師長に、病棟の特徴や多職種連携、退院支援の工夫、そして地域包括ケアの未来について語っていただきました。

「退院後の生活」を第一に考えている点が大きく異なります。生活に合わせた柔軟な退院支援が行われており、初めてここで働いた際には、その幅広さに驚かされました。

「退院後の生活」を第一に考えている点が増えています。生活に合わせた柔軟な退院支援が行われており、初めてここで働いた際には、その幅広さに驚かされました。

本人の意思が確認しづらい場合、誰が意思決定を担うのが課題となります。退院期限が迫る中で、退院後の生活をどう整えるのか、医師だけでは判断しきれない場面も多く、多職種に支えてもらいながら進めています。治療が終わったからといって急かすのではなく、その人にとって最適な退院支援を丁寧に行うことを大切にしています。



中面につづく

File 4

このたびの KYORITSUさん

全国ジャンボリー参加の青年職員

2025/11/27~2025/11/29

兵庫県にて第41回全国青年ジャンボリーが開催されました。青年ジャンボリー(以下JB)とは、民医連の青年職員が、学習会や交流会を通じて仲間を増やし成長するための活動です。「一人ぼっちの青年を作らない」を合言葉に始まり、日々の仕事の悩みや喜びを共有したり、学習をする場となっています。

全国JBは全国各地から民医連青年職員が集まり学習・交流をする大会です。今大会では阪神淡路大震災から30年という節目であることから、講演・ワークショップ・フィールドワークと、様々な災害学習を行いました。北部地域からは3名の青年職員が参加しました。



京都協立病院 看護師
川合 夏希さん
(入職4年目)

京都協立病院 理学療法士
山本 大貴さん
(入職3年目)

まいづる協立診療所 事務
小牟田 要さん
(入職3年目)

今回のJBを通して震災のことだけでなく、同じ志を持った仲間がこんなにたくさんいるのだと感じ、JBの意義を学びました。私は阪神淡路大震災を知らない世代です。今回の体験を通して震災の恐怖、これからのどうするべきかを沢山学び、感じる事ができました。初めは少し緊張していましたが、班のみんなの気配のおかげで楽しくJBを体験できました。

阪神淡路大震災の跡を巡るスタンプラリーで、道路のジョイントが捻じ曲がるほどの地震の凄まじさや復興の力強さを実感しました。また、能登半島地震の支援経験から、現地でなければ分からない被災の現実を再認識し、今後どこで災害が起きても自分にできる形で支援したいという思いが強くなりました。

いつ災害が起きてもおかしくない日本にいるが日頃の生活だといふ身近に感じなくなる「防災」にここまで向き合えたことがまず意識から見直しい機会になったねと班で感想交流しました。3日間を振り返って、今大会のスローガン「今何しよう? 会って話そうや」の通り、再会できた仲間や新しく出会えた仲間との対面でしか叶わない思い出がジャンボリーにまた参加したいと強く思わせてくれました。最高に充実した3日間でした。

だれもが安心してかかれる病院をめざして

病院理念

1. 安心安全の医療・福祉を推進します

私たちは、地域連携を大切にして、総合的に医療・福祉を提供し、地域の患者様の健康に責任を持ちます。私たちは、情報を公開・共有し、安心安全の医療・福祉を推進します。

2. 人権尊重・無差別平等の医療・福祉を提供します

私たちは、いつでも、だれもが安心して必要なサービスが受けられるよう、人権を尊重し、無差別平等の医療・福祉を提供します。

3. 平和を守り、社会保障を発展させます

私たちは、医療従事者の良心にかけて平和を守り、権利としての社会保障制度を発展させます。私たちは、患者様や地域の皆様、諸団体と共に、人間の尊厳が大切にされるまちづくり運動をすすめます。

公益社団法人 京都保健会 京都協立病院



〒623-0045
京都府綾部市高津町三反田1番地
TEL 0773-42-0440(代表)
0773-42-0025(小児科直通)
FAX 0773-42-9459(代表)



発行：京都協立病院広報委員会 <https://www.kyoto-kyoritsu.org/>

日本HPHネットワーク
Japan Network of Health Promoting
Hospitals & Health Services



ISO 9001 認証取得





病院から地域へつなぐ

Q6

今後の課題と展望

須藤医師 超高齢化が進む中、医療ニーズはますます複雑化しています。コ

ロナ後の肺炎や抵抗力低下、透析を選択されない末期腎不全など、急性期病院では受け入れられないが自宅にも戻りにくい患者さんが増えています。診療報酬改定の影響もあり、退院後の行き先が見つからず入院



伊藤看護師長 多くの時間を患者さんと過ごす病棟スタッフにとって、生活を支えている実感は大きなやりがいです。退院後の生活の希望が実現できた時は、スタッフ全員の励みになります。最期の時間に寄り添う機会も多く、専門性が問われる場面も多いですが、その分大きな充実感があります。

まず、中丹・南丹から兵庫県北部まで幅広い地域の患者さんを受け入れています。救急の相談や入院のSOSにも応え、地域の「最後の砦」として信頼が高まっていると感じています。



Q4

退院支援・在宅復帰で心がけていること

伊藤看護師長 当院では「退院後訪問」を行っており、昨年

伊藤看護師長 小さい病院だからこそ顔の見える関係が築きやすく、スタッフ同士も信頼関係があります。合同カンファレンスだけでなく、日常的に電話や直接のやり取りで在宅支援者と情報共有を行い、地域全体で支える環境づくりを進めています。現状に満足せず、今後もより良い連携を目指したいと思っています。

対談

地域包括ケア病棟

担当医師(腎臓内科)

看護師長

須藤 佳樹

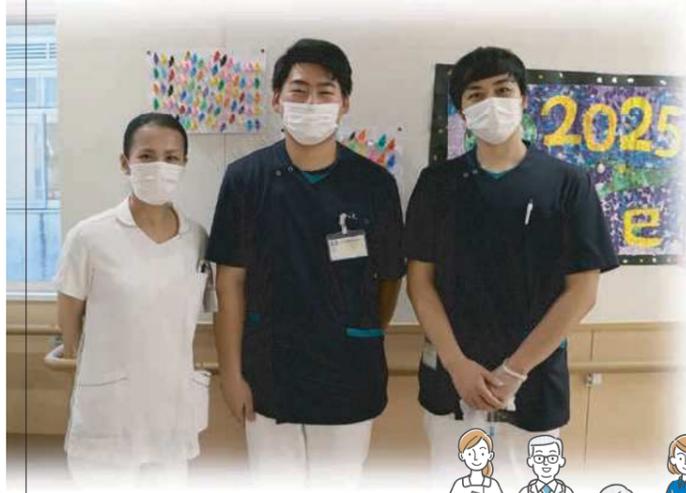
伊藤 可奈子

Q3

多職種連携の工夫と取り組み

須藤医師 この病棟では、本当に多職種に支えられていると感じます。看護師、介護福祉士、リハビリ、ソーシャルワーカー、薬剤師、栄養士など、それぞれが患者さんの情報を共有し、積極的に関わってくれているのが強みです。退院前の合同カンファレンスは、在宅で支えてくださる支援者の方々にも参加いただき、入院から在宅への移行をスムーズにする大切な場となっています。

ご家族は「元の生活に戻ってほしい」という思いが強く、現実とのギャップをなかなか受け入れられないことがあります。そのため、退院後に想定される生活を早い段階から共有し、変化が必要な部分はどうか補えるかを一緒に考えていきます。本人・家族が安心して退院できるように、丁寧な関わりを心がけています。



伊藤看護師長 地域の状況をいち早くつかみ、在宅で支える人たちとネットワークを強化することが重要です。スタッフ教育にも力を入れ、在宅生活に関する知識を増やしていく必要があります。訪問診療、訪問リハビリ、退院後の訪問や電話でのフォローを継続し、患者さんの生活を知る機会を増やすことで、病棟の価値を高めていきたいと思っています。

が長期化するケースも課題です。早期退院支援が求められる一方で、現実には受け入れ先が不足しています。地域と連携しながら、病棟単独ではなく複数機関で支える仕組みづくりが必要だと思っています。

Q5

病棟でのやりがいや印象に残ったエピソード

須藤医師 協立病院の良さは、経営面では負担となる場合でも「患者さんのため」に他科受診を柔軟に認めていることです。また、綾部市にとど



また、入院中に行なった退院指導や退院前カンファレンスの内容が適切であったかなど、今後の退院支援や多職種との連携の質の向上につなげていきます。

須藤医師 医師としては、入院期間の中で治療と退院支援を両立させる難しさを感じています。場合によっては、治療に時間が必要で退院支援が後手になることもあり、ソーシャルワーカーやCM、施設の方々の協力が欠かせません。訪問診療にも力を入れており、入院と在宅の切れ目ない医療が提供できるよう努力しています。それが地域で暮らす人々への安心につながるのではないかと思います。



どなたにも読みやすく

名札表記を変更しました

11月より、病院職員の名札表記をフルネームの漢字表記から、大きく名字のみの平仮名表記(ローマ字併記)に変更しました。



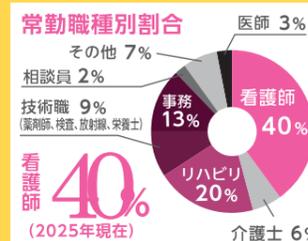
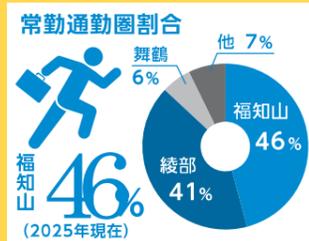
新しい名札は、来院される方から見やすいこと、お子さんからも分かりやすいこと、日本語が母国語でない方も読めること、を意識して作成しました。職員の個人情報保護にもなり、だれもが安心してかかりやすい病院をめざして今後も取り組みを進めます。

知っていますか?

野球肘

整形外科 医局長 辻信宏

今回は野球肘のお話しです。少年野球の界限で「剥離」と言われるアレのことです。ボールを投げる時、一旦後ろに引いて前に戻そうとする瞬間、肘は外に反ります。これを繰り返すことで、肘の内側のスジは伸びて、外側の関節は圧迫されます。小学生の骨は柔らかいので、スジに引つ張られて剥がれてしまい、投げるときに肘の内側が痛みます(内側型野球肘)。ここで我慢をすると、外側の関節の骨が欠けてしまう重傷の外側型に発展します。手術が必要になることもあります。内側型のうちは、数ヶ月から一年ぐらいの投球禁止で治ることが多いので、肘の内側に痛みを感じたら、是非病院に来て下さい。



数字でみる

KYO きょうりつ RITSU